

主 題：罪と私

聖書箇所：ローマ人への手紙 7章14-25節

パウロはこんなことを言っています。「私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。」(ローマ7:19)。ある人々は、これは主イエス・キリストを信じていない人の叫び、告白であると言います。また、ある人はこれは主イエス・キリストを信じている人の叫び、告白であると言います。正直、多くの信仰者はこのような告白を何度も繰り返されたことだと思います。自分自身を見て、自分が本当に罪深い存在だと気付いたときに、このようなことばが私たちの心から出て来ませんでしたか？「私はなんという人間なんだろう。なんと情けないのだろう。」と。ここに記されていることは、パウロ自身の叫びであり告白です。しかも、救われた人信仰者パウロの叫びです。これは救われていない人の叫びではなくて、主イエス・キリストを信じて救われた者が心から叫んだ、その叫びがここに記されているのです。

◎この箇所をめぐる議論

なぜ、最初にこのことを話しているのかと言うと、実は、こういうところに議論があるからです。ある人々はこのみことばを見て「これは間違いなくイエスを信じていない人たちの叫びである」と言います。しかし、証拠があるのです。というのは、私たちが学んで来たように、6章のみことばから2節には「私たちは罪に対して死んでいる」と言いました。11節にも「自分は罪に対して死んだ」、また、6節には「罪のからだは滅びて…罪の奴隷でなくなった」と書かれています。また、7節「死んでしまった者は、罪から解放されているのです。」、18節「罪から解放されて、義の奴隷となった」、22節「罪から解放されて神の奴隷となった」とあります。このようにパウロはすでに6章で救われた人々とはこのような人たちであると教えた後、7章に入って、特に、この14節から記されている人の特徴は、これまで語って来た「救われていない人の特徴」が見えるのです。例えば、14節には「**罪ある人間…売られて罪の下にある者**」、18節「**私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。**」、21節「**私に悪が宿っている**」、23節「**罪の律法のとりにしている**」、そして、24節には「**死のからだ**」と。そうすると、先に見た6章のみことばは、かつての私たちはこのような歩みであり、そして、私たちはそこから生まれ変わったと、パウロはそうのように話しているけれど、7章14節からは救われていない人のことを話しているのではないか？6章で教えてくれた救われた人の特徴と14節から語られている人の特徴は一致しないのではないか？だから、ある人はここに書かれていることは「パウロが救われる前のこと」と言うのです。

しかし、結論を言うと、ここに記されているのは「救われた人のこと」です。もっと正確に言えば、パウロ自身の救われてからの証です。救われる前の証ではなく救われてからの証なのです。その理由を四つ上げましょう。

◎7:14～はパウロが救われてからの証である、その理由

1. 動詞の時制の変化

14節からここで使われている動詞の時制が変化しています。それまでは過去の話をしていきます。動詞を見ると殆どが過去です。過去の事実を述べて来たのです。このようなことがかつてあった、このような者だった…と。ところが、14節からは動詞の時制が現在形へと変わっています。なぜ、そのように時制を変えたのでしょうか？

2. 主語の変化

これまでの主語を見ると「あなたがた」とか「私たち」です。ところが、14節からはすべて一人称の単数「私」になっています。通常、私たちは「私」と言って動詞が現在形なら、今、現在起こっていることを言います。ですから、この二つの理由を見ただけでも、パウロが主語を「私たち」から「私」に変えて、過去の話から現在の話にしているというのは、救われたパウロ自身が今自分自身に起こっていること、もちろん、この書簡を記したそのときですが、自分のうちに起こっているそのことを記していると、私たちは推測することが出来ます。

3. 文脈の変化

前回見た7章の7節から13節には、自分のことがよく分かっていなかったパウロのことが記されていました。パウロ自身「私は神の前に正しく神の前に救われていると思っていた」と言っています。けれども、実はそうでなかったということが続いて記されていました。私は神の前に喜ばれている存在だと思っていたけど実はそうでなかったと、その証が書かれていました。そして、14節から25節を見ると、今度はその自分のことがよく分かっているパウロが記されているのです。だから、7-13節は

自分のことが正しく分かっていなかったパウロのことが記されており、14節からは自分のことがよく分かっているパウロのことが書かれているのです。ですから、自分の心の中に起こっている様々な葛藤を彼は見事に描いているのです。自分の心の中で何が起こっているのかということです。ですから、この文脈は7節から13節、そして、14節から25節と変わっているのです。

文脈に関してもう一つ付け加えるなら、パウロは6章から救われた人たちの歩みについて教えて来ました。別の言い方をすれば、「聖化」ということです。クリスチャンとしてキリストにお会いして栄光のからだをいただくその時まで、私たちは主とともに歩んで行くのですが、パウロはその歩みについて6章から教えています。ですから、当然その話は継続している訳で、7章の後半にもそれと同じように信者の歩みについて語っていることは疑う余地はありません。ですから、パウロがここで言っていることは「信仰者としての歩み」ですから、これは救われる前のことではなくて、当然、信仰者として彼自身が経験していた様々な葛藤なのです。救われていないときのことではなくて、実は、救われた後のことが語られていると、そのように見るのが文脈から正しい解釈だと私は思うのです。

4. 生き方の変化

時制、主語、文脈が変わっているだけではないのです。生き方の変化が見られるのです。

(a) **自分の罪深さに気付いている**：パウロは自分がどれ程罪深い存在であるかということ告白しています。イエスを信じる前は自分はそれ程罪深い者だとは思っていません。欠点や悪いところはあるけれど、あの人たちよりはマシだと思っているのです。ところが、イエスを信じることによって、人との比較ではなく、自分が神の前にどのような者であるかがより鮮明になって行くのです。自分の罪深さが分かって来たパウロがここで明らかに告白しているその告白を見ると、本当に、彼は自分のことを正しく見ていたことが分かります。

(b) **律法が正しいものであると分かっている**：12節では「**律法は聖なるものであり、**」と言い、14節では「**律法が霊的なものである**」と言っています。律法は正しい、神の掟は正しい、戒めは正しい、神の教えは正しいと認めています。イエスを信じる前はそのようには思っていなかったはずですが。

(c) **罪を憎んでいる**：15節「**自分が憎むことを行なっている**」と、罪に対してこのような表現を使っています。19節から21節を見ると「**したくないこと**」と繰り返しています。しかも、「**したくない悪**」と言っています。罪を憎む、これはイエスを信じて救われた人の特徴です。罪を愛する者が罪を憎む者へと生まれ変わるのです。これが救いです。神に逆らっていたその生き方を愛し、そのような歩みを継続してそのように生きて来た私たちが、それは間違っていると神を愛する者と生まれ変わったのです。ですから、パウロのこの証を聞いていると、明らかに彼自身が罪を憎んでいることが分かります。

(d) **神の律法を喜んで**：22節に「**私は、内なる人としては、神の律法を喜んで**」とある通りです。神の教えを聞いたがっているのです。救われた人の特徴は神のみことばを聞きたくて仕方がない、神のみことばが私たちにとって霊的な糧だからです。

(e) **キリストが罪から救い出してくれることを知っている**：25節に「**私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。**」とあります。罪からの救い、その希望は神にあると言うのです。

ですから、このように見た時に、彼の生き方に明らかに変化が生じているし、その変化は彼が救われていることを確信するに値するものです。

ですから、このような理由から、イエス・キリストを信じて救われていたパウロが、信仰者として歩んで行くその歩みの中であって経験していた様々なジレンマを記していると、私たちはそのように結論づけるのです。このみことばを見て行くと、パウロの信仰者としての歩みは失敗の連続でした。私たちがそうであるように失敗に次ぐ失敗でした。ですから、その証を聞くと私たちは励ましをいただきませんか？ここに一片の過ちもない、罪もない完全な方がいらっしゃる、もちろん、主イエス・キリストはそうですが、頑張っただけでそのような人になりなさいと言われたら私たちは無理だと思います。しかし、ここに私たちと同じように神の恵みによって救われたパウロを見ると、パウロが「私を模範としなさい。私を見なさい。」と言ったことで、パウロも私たちと同じように罪との戦いを経験しながら生きていたことを知るのです。

そして、この後8章に入って、私たちはどうすれば完全でなくても勝利ある生活を歩んで行くことが出来るのか、そのことをパウロは教えてくれています。彼はすばらしい希望を私たちに教えてくれるのですが、少なくとも、私たちと同じように様々な罪との葛藤を経験しながら歩んだ信仰の先輩がここにいるのです。彼はどのようにその戦いを戦って来たのでしょうか？罪に対する敗北がもたらす失望や落胆、悲観、絶望、自己嫌悪などに、彼はどのようにして立ち向かって行ったのでしょうか？というのは、私たちも余りにも自分の醜さ、愚かさが鮮明に見えて来ると嫌になって来ます。こんな者がどうして神の前に立つことが出来るのか、私たちが自分を見ているよりも、パウロは自分自身のことを正しく理解していました。そのパウロがどのようにしてそのジレンマと立ち向かって行ったのか、今日から私たちがご

いっしょに見て行きたいのは、この信仰の先輩であり、私たちの模範であるパウロの信仰生活の葛藤と、そして、その勝利の秘訣です。願わくは、このパウロの葛藤を通して、私たち一人ひとりがそこに安らぎを見出すだけではなくて、パウロ自身が得た勝利の秘訣を私たちが模範として歩むことができるように、そして、私たちも彼と同じように勝利ある生活を送り続けて行くことが出来るために、彼の歩んだ秘訣を見て行きましょう。

今日はそのすべてを見ることは出来ませんが、この14節から25節を見て行くと、ここには三つの区分が見られます。(1) 14-17節、(2) 18-20節、(3) 21-25節です。しかも、この(1)と(2)の区分、14節から17節に記されていることが18節から20節でも記されています。同じような内容が繰り返されているのです。どちらも本質的な罪深さ、そこを認めるところから始まり、そして、罪の存在を承認して終わっているのです。具体的に見ましょう。14節「**私たちは、律法が靈的なものであることを知っています。しかし、私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です。**」、彼はまずここで自分自身の罪深さを認めています。「律法は靈的なもの、でも、私は靈的ではない者だ」と言っているのです。律法と自分を対照、比較するのです。そのことを「**私たちは…知っています。**」と言っています。ですから、パウロは「**律法が靈的なものであることを知っている**」し、同時に、自分が「**罪ある人間であり、売られて罪の下にある者**」だということも知っていると言うのです。18節には「**私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。**」とあります。ここでもまた「**知っています。**」と言います。何を知っているのか？「**私の肉のうちに善が住んでいないのを知っている**」、つまり、私自身がどれ程罪深い者であるかということを知っていると言っているのです。ですから、14節でも18節でも「**私は私の罪深さを知っている。**」と繰り返しているのです。そして、14節ではそのように自分の罪深さを告白したパウロは、17節でこのように言って最初の区分を閉じます。「**ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。**」と、同じ表現が20節にも出て来ます。「**もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住む罪です。**」と同じことを繰り返しています。そして、21節「**そういうわけで、**」と三つ目の区分になって、パウロは結論的なことを話そうとするのです。

ですから、14節から17節と18節から20節には自分自身がどのような存在であるか、そのことを語って、そして、その後で、自分自身のうちにある様々な罪の葛藤を証言し、そして、結論へと続いているのです。自分のことを評価し、自分のことを証言し、そして、結論へと続いて行く、これが繰り返されているのです。このような流れになっているのですが、まず、私たちはその最初の区分を見て行きましょう。まず最初は、パウロ自身の自分に関する証です。

☆パウロの信仰生活の葛藤と勝利の秘訣

A. パウロの証 14-17節

1. 評価：自己評価 律法との対象による評価 14節

1) 律法は靈的なものであることを知っています

先ほど14節で見た通り、ここには彼自身の評価が記されています。自己評価です。彼は律法と自らを対照しているのです。そして、自分がどのような存在であるのかを話しているのです。彼はこう言いました。「**律法が靈的なものであることを知っています。**」と。私たちはこれまでにパウロ自身が律法に関してどのような考えをもっているのかを見て来ました。思い出してください。パウロのメッセージを聞いていた者たちは、パウロは律法を軽視しているとそのように批判しました。「律法を無視して生きたらいいのだ」、つまり、それは「好きに生きたらいいのだ」ということを教えていると。そこでパウロは「**とんでもない。**」と反論します。(a) **律法は大切なもの**＝なぜ、大切なのでしょうか？もう一度7:7を見てください。律法は本当の自分を知ることを手伝ってくれるもの、律法によって私たちは自分の本当の姿を知るとパウロは言いました。律法が「**してはならない**」という命令を私たちが受けるときに、私たちはそれをしたいと思うし、また、律法が「**これをしなさい**」という命令を私たちが聞くなら、私たちはそれをしたくないと思います。つまり、私たちがどれ程神の前に神の基準から外れているかということを知りたいと思うのです。だから、律法は自分の本当の姿を知る手助けをしてくれるのです。律法によって私たちは自分には救いが必要であることを悟らされて行くのです。そのことはもうすでに見て来ました。(b) **律法は聖なるもの**＝二つ目に12節で「**律法は聖なるものであり**」と言っています。律法は聖なる神のご性質を反映しているのです。ただの人間の考えではないのです。聖い正しい神が私たちに何を要求するのでしょうか？それは間違いなく神のご性質と一致するものです。ですから、私たちが律法を目の当たりにするときに、神が望んでおられる基準、神ご自身の基準から私たちがいかに外れた存在であるかということに気付くのです。(c) **律法は靈的なもの**＝三つ目に14節で「**律法が靈的なものであることを**」とパウロは言いました。なぜなら、靈的な神によって与えられたものだからです。

そのすばらしい律法、それと自分とを対照した訳です。「しかし」と続きます。「私は罪ある人間であり」…。だから、自分が神の基準からいかに外れているかということのパウロは良く分かっていたのです。それがこの告白に表わされているのです。

2) 私は霊的でないことを知っています

「律法は霊的なものであることを知っています。」と言いました。そして、パウロは「私が霊的でないことを知っている」と言うのです。そのことをパウロはこのようにことばで表現しています。「私は罪ある人間であり」、そして、「売られて罪の下にある者です。」と。

(1) 私は罪ある人間であり

パウロは「私は罪ある人間だ」と告白しました。新約聖書では「罪ある人間」と訳していますが、口語訳聖書では「私は肉につける者、肉についている者である」と訳しています。というのは、実は、ここで「罪ある人間」と訳されているこの原語を見ると、そこには「肉の人」と記されています。直訳すれば「肉の人」となるのですが、それを新改訳聖書では「罪ある人間」と訳したのです。「肉の人」とはどういう意味でしょう？まず、この「肉」とはどういう意味でしょう？

◎肉とは？

(a) からだ = 人間だけでなく動物でもその「からだ」を指して「肉」と言います。I コリント 15 : 39に「すべての肉が同じではなく、人間の肉もあり、獣の肉もあり、鳥の肉もあり、魚の肉もあります。」とある通りです。

(b) 人の性質 = 今はこれが大切です。人間に生まれながらに備わっている特徴、私たちが生まれながらも持っている性質です。それは神を無視し、神ではなくて自分自身を愛し、自分に仕え、自分を喜ばせ、自分の力に信頼を置いて生きるように私たちのうちに働いて来たものです。だれからも教えられませんでした。生まれながらにそのような存在として私たちはこの世に生を受け生きて来たのです。「神に逆らいましょ」などとはだれからも言われませんでした。私たちは逆らう者として生まれ、逆らう者として生きて来たのです。「自分を愛しましょ」と言われなくても、自分を愛する者として私たちは生まれ生きて来たのです。このような性質、つまり、私たちは肉をもって生まれて来ているのです。さらに言うなら、その肉、性質は、自分自身の人生から神を追い出そうとするものです。だから、生まれながらの人間は神の前に出て行こうとしないのです。逆に、神を排除しようとするのです。その結果、人はどうして物が存在するのかという説明をしなければならなくなったときに、進化論を教え始めたのです。神によって創造されたのではなく、偶然に物が存在するようになったと言うのです。いかに人間は神を追い出そうとしているのかが分かります。私たちを造ってくださった創造主を人間は認めたくないのです。人からそのようなことを教えられなくても、私たちはそのように生まれ、そのように生きて来たのです。神の栄光を現わすために造られた人間が、神の栄光ではなくて、自分の栄光のために生きる、このような存在なのです。これが生まれながらの人間の特徴です。

①「肉」の存在・罪の内住を教えている

そのことを頭に入れてパウロのことばを見ましょ。彼は「私は肉の人だ」と言います。つまり、パウロが最初に言うことは、救われている私のうちにまだ肉が存在しているということです。罪が私のうちに住んでいる、罪の内住、肉の存在、そのことを彼は教えているのです。今見て来たような肉が今も自分のうちに宿っていると言います。18節に「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。」とある通りです。悲しいけれども、神の恵みによって救われた私の中には罪の欲望が今も存在していると言うのです。かつて私たちを支配していた罪からは救われたのです。しかし、その罪がまだ自分のうちには宿っていると言うのです。シーセンという神学者は「罪と死との法則」で救いについて8章2節をこのように表現しています。「なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。」と、これは救いのことですが、彼は「罪と死との法則からの解放は、墮落した性質の根絶を意味するものではない」と言います。つまり、救われたと言っても、だからといって墮落した性質がその信仰者のうちから全くなくなったということはありませんと言うのです。

残念ながら、私たちのうちにはそのようなものがまだあるのです。だから、彼は「肉の人」、「罪ある人」と言ったのです。誤解してはならないのは7:5でパウロは「私たちが肉にあったときは、」と書いています。この「あった」というのは前置詞ですが、これが意味していることは、肉に従って生きていた、肉の中を生きていたという救われる前の状態のことです。肉の欲望や行動がその人の特徴だったと言っているのです。思い出してください、エペソ2:3でパウロは「私たちがみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」と言っています。つまり、救われていないとき私たちは肉の欲の中に生きていたと言うのです。ですから、肉に従って生きていた、肉の欲望、行動がその人の特徴だったのです。

その欲望のおもむくままに私たちは生きていた、肉の奴隷として生きていた、これが救われていない人の特徴です。ですから、7：5で言う「肉にあった」というのは、肉の中を生きていた、救われていない人のことです。でも、この14節で言われている「罪ある人間」、「肉の人」というのは救われている人のことです。誤解しないように次に言うことをよく考えてください。「肉の中を生きている」と「生きている中に肉がある」とは違うのです。肉の中を生きているというのは、肉が主人であり、私たちはその奴隷として生きているのですが、私たちが生きている中に肉が存在するというのは、もう肉は私たちの主人ではなくなったのです。確かに、私たち信仰者は生まれ変わったのです。

パウロがⅡコリント5：17で言ったように「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」、私たちは確かに新しくされた、私たちのうちなる人は全く新しくされたのです。だから、7：22に「私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいる」と言ったのです。なぜでしょう？内なる人が新しくされたからです。生まれ変わったからです。罪は完全に赦され、聖い神の前に立つことができる聖いものとされ、聖霊なる神の内住をいただき、天に国籍をもつ者と私たちは生まれ変わったのです。しかし、悲しいことに、私たちは罪が内住するからだを擁しているのです。だから、パウロはそのことを繰り返してこの14節のところから教えるのです。この罪の内住についてこのように言います。17節「私のうちに住みついている罪」、18節「肉のうちに善が住んでいない」、20節「私のうちに住む罪」、21節「私に悪が宿っている」、23節「からだの中には異なった律法があって」、また「からだの中にある罪の律法のとりこにしている」、24節「死の、からだ」、そして、25節では「肉では罪の律法に仕えているのです。」と述べています。

私たちの中に存在する罪が、私たちをかつての考え、かつての生き方に引き戻そうと働き続けているのです。だから、信仰者の中には実際に戦いがあるのです。パウロはそのことに関してこのように述べています。15節「自分がしたいと思うこと」と「自分が憎むこと」、19節「したいと思う善」と「したくない悪」、23節では「心の律法」と「罪の律法」、25節「心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えている」と、これが戦いだと言うのです。これが私たち信仰者クリスチャンなのです。確かに、生まれ変わりました。確かに、罪が赦されました。確かに、聖いものとされました。しかし、同時に、まだ私たちの中にこの肉、罪が存在しているのです。でも、皆さんにとっての朗報はこの罪と戦い続けるのはこの地上に生きている間だけなのです。この戦いは永遠には続きません。終焉を迎えるときがやって来ます。私たちが天に上がったとき、私たちは新しい栄光のからだを受け取ります。そのことをパウロは待望していました。ピリピ3：20-21「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。：21キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」。これはクリスチャンのことです。からだが変わるのです。栄光のからだをいただくのです。新しいうちなる人をいただくとは言っていません。からだが変わると言っているのです。私たちが主イエス・キリストにお会いするときに、遂にこの罪の存在から救い出されます。ある人はこの地上における死を通してそれを経験します。肉体的な死を通して私たちはこの罪から完全に決別するのです。肉体的な死を迎えてその人はその後も罪との戦いを経験するのでしょうか？しません、終わるのです。また、ある人は再臨のときに、主イエス・キリストが私たちを迎えに来てくださるそのときに、死を経験することなく罪のからだから解放されます。そのときに、私たちはようやく罪を犯す可能性がなくなるのです。でも、そのときまでこの地上にあって戦いを経験し続けるのがクリスチャンなのです。ですから、罪ある人間だと言ったパウロ、彼は自分のうちには肉が存在している、罪が内住しているということを書いたかったのです。

②信仰的な未熟さを教えている

パウロにはもう一つ言いたいことがあったのです。それは「信仰的な未熟さ」です。というのは、この14節で「罪ある人間」と訳されていることばは、先ほどから「肉の人」と言っていますが、このことばはⅠコリント3：3にも出て来ます。「あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属してはいませんか。そして、ただの人のように歩んでいるではありませんか。」と。「肉に属している」ということばが繰り返されています。この箇所の方語訳を見ると「あなたがたはまだ、肉の人だからである。あなたがたの間に、ねたみや争いがあるのは、あなたがたが肉の人であって、普通の人間のように歩いているためではないか。」とあります。方語訳はこのギリシャ語を「肉の人」と訳したのです。先ほど、私たちはローマ7：14で「罪ある人間」を「肉の人」と拘ったのは、同じことばがこのようにⅠコリント3：3の方語訳ではそのように訳されているからです。

そこで少し考えていただきたいことは、だれが「肉の人」なのかです。新改訳で言うなら、だれが「肉に属している人」なのか？コリントの人々です。なぜなら、これはコリントの人々に対して話しているからです。もっと正確に言えば、Ⅰコリント3：1には「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御

霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。」とあります。つまり、「肉に属する人」、「肉の人」という彼らは救われてはいるけれども、残念なことに、彼らは信仰的には非常に若い者たちだったということです。コリントの人々をこのように呼ぶことに私たちは抵抗を感じません。というのは、コリントの人々のその生きざまを見たときに、確かに、信仰的に非常に若い、幼稚な人々だからです。しかし、ローマ7：14で「私は罪ある人間だ」と告白したのは、コリントの人々ではなくてあのパウロだということです。信仰のチャンピオンのような人、すべての信仰者の模範的存在であるパウロが「私はまだ信仰において未熟だ」と言ったのです。なぜ、彼はこんなことを言ったのでしょうか？それは、パウロ自身が自分のことを正しく知っていたからです。聖書が教える「霊的な人」というのは、言い方を変えるなら、謙虚な人、へりくだった人です。それは「へりくだらなければならない」ではないのです。なぜ、パウロがこんなに謙虚だったのか、へりくだっていたのか？繰り返しますが、そのカギは彼自身が自分のことを知っていたからです。彼は自分のことを正しく知っていたゆえに、自分のことを自慢しないのではなく、自分のことを自慢できなかったのです。Ⅱコリント11：30では「もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります。」と述べています。彼は同じことをⅡコリント12：5でも繰り返しています。「このような人について私は誇るのです。しかし、私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。」、もし何か誇るとするなら、私が誇れるのはただ一つ、自分の弱さだと言います。また、ガラテヤ6：4ではこのように言います。「おのこの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思っただけのことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。」と。これは厳しいことばですね。自分のことをよく見てごらんください。あなたがどのように生きているかよく調べてごらんください。その上でいったいあなたは何を誇りますか？私の優しさ、私の愛、そんなものは誇れない、欠陥だらけだから…と。そのパウロがガラテヤ6：14では「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。」と言います。彼はよく自分を知っていました。

皆さんはどうでしょうか？こうして信仰者パウロの証を見たときに私たちが教えられることは、彼はだれとも比較していないということです。彼は主の前に自分を正しく見ていました。神のことは知れば知るほど、なぜ、このような私がこれほどの祝福をいただく資格があるのか、なぜ、このような扱いを神が私に対してしてくださるのか、そのことを知っていたパウロは、これから見て行くように、神が喜ばれることを常に選択しようと堅く決心して生きたのです。自分の罪深さを知り、そのような私をこれほどまでに愛してくださっている神の愛をしっかりと悟ったときに、彼ができたこと、彼が決心したことはこの神を悲しませたくない、少しでもこの神に喜んでいただきたいということです。そして、彼はそのように歩むのです。だから、彼は、確かに、罪が存在し、罪が間違った方向へと引っ張ろうとするけれど、私はその中であって神に喜ばれたいと、そのことを願っていたから、このみことばは私たちに繰り返して彼の悲しみを伝えてくれるのです。パウロは自分の罪の歩みを見て喜んでいません。悲しんでいます。なぜ、私はこのように神を悲しませ続けるのか、なぜ、私はこのような生き方をするのか、これは神を知っている者の生き方です。「霊的な人」の生き方です。あなたは神を、あなたは自分を知らずしていませんか？そのことを知っているかどうかというのは、あなた自身の生き方が明らかにしています。罪を憎む者として歩むことです。ちょうど、私たちの模範であるパウロがそのように歩んだように。そして、神に喜ばれることを考え、それを選択しながら生きることです。なぜなら、そのことを神は私たちに期待していらっしゃるからです。